

# 関西学院大学 研究成果報告

2019年4月20日

関西学院 院長殿

所属：文学部  
職名：教授  
氏名：村山 功光

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国：ドイツ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	グリム兄弟の〈自然ポエジー〉
研究実施場所	フランクフルト大学（ドイツ）
研究期間	2018年3月28日～2019年3月20日（12ヶ月）

## ◆ 研究成果概要（2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

フランクフルト大学近代語文献学部児童文学科のUte Dettmar教授に受け入れていただき、グリム兄弟の思想、とくに文学観を〈文化学的〉アプローチで多角的に研究した。フランクフルト大学では精神科学系図書館や中央図書館など複数の図書館を利用することができたほか、Dettmar教授および児童文学科の教員、学生とは研究について随時議論し、ドイツでの文学研究の現状（特にテーマや手法の点で）をマイクロレベルで知ることができた。

また、フランクフルトのゲーテハウスの運営主体であるFreies Deutsches Hochstift（ドイツ文学研究財団）のWolfgang Bunzel教授には大学院コロキウムに招待され、ドイツ・ロマン派の文学・芸術・思想の研究者と意見交換する機会が持てた。この財団は現在、ゲーテハウスの隣に「ヨーロッパ・ロマン主義博物館」を建設中で、これはドイツ・ロマン派の資料研究には欠かせない施設となる。グリム兄弟（〈ロマン派〉の一員）を広くヨーロッパのロマン主義のコンテクストで捉えるためにも、Bunzel教授（兄弟にメールヒェン収集を促した詩人ブレンターノの研究者）との議論はとても有意義だった。

2018年8月には3日間にわたる国際学会「メールヒェンと老齡」（W・カーン・メールヒェン財団主催）に参加し、ドイツおよびヨーロッパ各国の物語研究、民俗学、グリム研究の専門家と知り合い、議論することができた。メールヒェン（昔話）が伝えてきた〈老齡〉テーマ、〈老齡〉の伝承者を理想の語り手としたい近代人の憧憬、ヨーロッパ

各国で変容し受容されてきたグリム童話などについての議論があり、現在の物語研究の動向がはっきりと分かった。この学会には、〈研究者〉ばかりでなく、現代のメールヒェンの語り手、教育関係者なども参加しており、ドイツおよびヨーロッパにおける現代のメールヒェン文化の実態を知ることもできた。

この時に知己を得たカッセル大学Holger Ehrhardt教授（グリム研究者）とは11月に、グリム兄弟が長く研究生活を送ったカッセル市で再会し、グリム兄弟に関係のある場所（旧居跡や勤務地など）を詳細に案内していただいた。グリム研究の現状と問題点を、丸一日かけて一対一で深く議論するという、きわめて濃密な経験で、個人的にも交友が深まった。

また、上記国際学会のオーガナイザーであるチューリヒ大学Harm-Peer Zimmermann教授からはゲストスピーカーとして講演の機会を得て、2019年3月にチューリヒ大学で「グリム兄弟がメールヒェン受容に用いる〈母乳〉の比喩 — 声・養分・女性」の題で講演した。グリム兄弟は〈メールヒェンは、子どもが母乳を飲むように、母から自然に耳で聞いて受容すべきだ〉と述べているが、〈母乳〉のメタファーには1800年期のさまざまな思想が流入している。〈母が自分で授乳する〉ことは医学・栄養学的に奨励されただけでなく、教育学的にも正しい母子関係の形成にとって必須だとされた（上流階層では授乳は乳母に任されるのが通例だったのに対して）。さらに、授乳は啓蒙的専制君主による富国強兵策内では母の義務として、法律で規定されるに至っていた。グリム兄弟による〈母乳〉は、メールヒェン（民衆のポエジー）が人間にとって不可欠の滋養となること、また〈声〉というメディアを通して無自覚的に耳に語り込まれること、そして近代市民社会の核家族においてこれを担うのは母であることを表わす恰好のメタファーだったのだ。この発表を基にして発展させ、いずれ論文の形にして刊行したいと考えている。

留学中の主要な研究成果は、『グリム童話集』第2版の扉絵に掲げられた語り手女性の有名な肖像画についての研究論文に結実させることができた。グリム兄弟の末弟で画家のLudwig Emil Grimmが描いた語り手Dorothea Viehmannの肖像には3つのヴァージョン（鉛筆画、エッチング①、エッチング②）があり、語り手の中年女性についてのグリム兄弟のテキストとルートヴィヒ・エーミールによる図像化の間には相互作用が見られることを考察した。グリム兄弟はこの田舎の女性を、〈民衆〉の典型であり文字に寄らない口頭伝承の記憶を保持する理想の語り手として、手紙や『グリム童話集』序文で描写しており、これにルートヴィヒ・エーミールによる図像化も影響を受けているが、その図像を見てグリム兄弟はさらにこの語り手の描写を深める、という相互作用の過程が見て取れる。そこには、この女性を〈近代都市住人にとっての他者〉、〈自然および古代に近く、教養に毒されていない人々の代表〉として表象するオリエンタリズムや、物故したこの語り手を追悼し神聖化する演出が透けて見える。また、民衆ポエジーの担い手を集合的・匿名的〈民衆〉としたグリム兄弟の言説と、Viehmann個人を特別な語り手として顕彰する姿勢との矛盾も露呈しているのだ。この論文は口承文芸・物語研究の国際誌“Fabula”（査読あり）に、編集者Zimmermann教授の推薦もあって採用され、2019年11月に出版される予定だ。

なお、この図像学的研究において私は当初、不慣れな美術史的アプローチに自信が持てなかった。この点で幸運だったのは、フランクフルト大学非常勤講師のPetra Schmidt-Hartmann氏（美術史の専門家）に原稿を通読してもらい助言を受けたことと、またシュテーデル美術館学芸員Regina Freyberger氏（グリム童話の挿絵について博士論文を書いた）と議論できたことだ。今後私は、具体的な図像だけでなく文学メタファーをも図像学的に考察しようと考えており、美術史家との意見交換は得難い経験であった。

ドイツでは、図書館や研究機関などの施設で落ち着いて資料調査ができ、さまざまな分野の複数の専門家と頻りに意見交換できる環境は実に貴重だった。研究者ネットワークが広がっただけでなく、実際に会って話し合うことによって深められた。1年間というまとまった時間を得て研究に専念することができ、成果を口頭発表1本と論文1本にまとめることができたのも、まさに学院留学のおかげだ。今後、この留学で築いたネッ

トワークを活かして研究を国際的に発信し続けたい。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。